

ハンドボールにおける速攻の特徴～高校男子の試合から～

The characteristic of the fast break in the handball - from high school boy's game

1K05A053

指導教員

主査 奥野景介先生

尾花 茂樹

副査 堀野博幸先生

【緒言】

近年、ハンドボールのプレイスタイルにおいてスピード化が進み、攻撃権の獲得から相手が帰陣しきる前に攻撃すること(以下、速攻)が強化領域とされてきた。しかし、ハンドボール競技の速攻についての先行研究において、対象は大学生であることが多く、最も登録人数の多い高校男子を対象とした研究については、ゲーム分析はあるものの、速攻を中心に焦点を当てた先行研究は散見される程度である。男子大学生と比較すると競技能力の劣る男子高校生はシュートの成功率が低くなると報告されている。したがって速攻の頻度が増し、速攻の守備からの速攻(以下、逆速攻)も多く見られると予想できる。そこで、本研究ではハンドボールの各局面の要素に分けて分析することによって、高校男子ハンドボール競技における速攻の特徴を提示することを目的とした。そして、明らかになった知見を今後の指導現場での一助となれればと考えた。

【方法】

対象は平成20年度東京都高等学校ハンドボール秋季大会兼全国高等学校ハンドボール選抜大会都予選における試合。分析対象とした試合は対戦相手によるレベル差が小さいと考えられる、ベスト16以上のチームによる6試合とした。また、一般的な速攻の特徴を見るため、オールコートでのDFシステムを基本として用いていた1試合は除外し、合計5試合のデータを対象とした。そして対象とする試合をセンターライン付近からビデオカメラ(SONY、HDR-HC7)にて撮影した。その後、

VTR再生によりデータを入力、浅野ら(1998)のモデルを参考に分析モデルを作成し、局面ごとに分類、特徴をみることにした。データ分類は大まかに、攻撃権の獲得について、パス回数について、結果について、それぞれ分類した。

【結果と考察】

本研究の分析対象試合における、全体の攻撃活動に占める速攻の割合は42.6%とおおよそ半分弱であった。遅攻に対する守備(以下、SET DF)からの速攻に関して、遅攻へと移行しなかったものについては速攻全体の6割を占め、その成功率も47.5%と全攻撃局面の平均値の33.9%を大きく上回っていた。一方、逆速攻の成功率は28.6%とSET DFからの速攻に比べると大きく下回っていた。

これは速攻に対する守備から更に攻撃へと切り替え、連続行動をすることによってプレーの精度が下がるためであると考えられる。また、両者を比べると逆速攻の方がシュートへと持ち込みにくい傾向にあった。SET DFからは60%台の確率でシュートへと繋げられるが、逆速攻では50%台へと低下していた。そして、攻撃権の獲得はおおよそ半数がシュートミスによるものであった。SET DFからの速攻も逆速攻も、攻撃権の獲得状況の構成比率は大きく変わらないことがわかった。また、パス回数について注目すると、SET DFからの速攻においては速攻成功率と速攻達成率(＝移行する割合)の両面で、パス回数2以上は割合が低下していることがわかった。逆速攻におけるパス回数1では速攻達成率は69.2%と高い数値を示しているが

速攻成功率は38.5%と、SET DFからの速攻のパス回数1の成功率(66.7%)と比べると、大幅に下がっていた。

【結論】

本研究では対象をハンドボールの各局面の要素に分けて分析することによって、高校男子ハンドボール競技における速攻の特徴を提示すること

を目的とした。その結果、相手のシュートミスが速攻のきっかけとなり、SET DFからの速攻は高い成功率であったが、逆速攻の成功率は高くないことがわかった。今後の研究課題として、逆速攻に関してはサンプル数を増やすこと、プレーエリアや人数を調べること、他世代との比較することが必要であると思われた。